ニューヨーク便り 2021/2022

Loving and Leaving New York[1]

城西国際大学　　神余　崇子

2021 年 8 月から 2022 年の 7 月まで夫の海外赴任に帯同しニューヨークに滞在した。「米国滞在中に感じたこと」をテーマにニュースレター執筆のご依頼を受け、何を書こうかと思い巡らせたが、やはり一番に感じたのは 33 年前との違いであった。

個人的にアメリカに長期滞在するのは今回が二回目である。33 年前、南部アラバマ州にホームスティしたのが前回だが、当時のスーパーマーケットでの記憶は「すべてが半額」だった。某国産メーカーのカメラがウォールマートで日本より安く売られていたことに驚愕した覚えがある[2]。そして 2021 年夏、ニューヨークマンハッタンのスーパーマーケットで初めての買い物した時に感じたのは「すべてが 2 倍」だ。田舎と都会の差ではない。日本の長期デフレの影響は日本国内にいれば感じることが少なくても、アメリカで生活すると、円建て給与生活者の相対的購買力の弱さが身に沁みる。記録的な物価上昇と急激な円安も相俟って[3]、まさに「安いニッポン」[4]を実感する一年となった。そしてもう一つ南と北の差も体験した。南で見たあの風景の理由を 33 年越しに北で学ぶこととなった。

本稿のみで、個人的に見聞きしたこと全てを記すのは困難ではあるが、実際に参加したマンハッタン周辺を巡るバスツアーの行程と合わせて、コロナ禍のニューヨークの街や大学の様子、記録的なインフレと家賃高騰といった生活経済状況、そしてアメリカ社会の根本問題とされる人種問題と街を歩けば解る所得格差について述べる。

＜コロナ禍のニューヨーク＞

2022 年 5 月の終わり頃、8 番街 52nd Street の角に停車している大型バスに乗り込み出発を待っていると、スペイン語、英語、イタリア語、フランス語そして中国語など世界各国の言語が聴こえてくる[5]。マンハッタン周辺を巡る少しマニアックなバスツアーは満員御礼、一つの空席もなく、国内外からの観光客はすっかり元に戻っているようだった。

---

[1] Sari Botton(ed.) *Goodbye to All That: Writers on Loving and Leaving New York,* 2021 のタイトルから表題をお借りしました。

[2] 1988 年月中平均為替レート 8 月は 1 ドル＝133.63 円

[3] 2021 年月中平均為替レート 8 月は 1 ドル＝109.82 円、2022 年 7 月 1 ドル＝136.63 円

[4] 中藤　玲『安いニッポン「価格」が示す停滞』日本経済新聞社 2021 年 3 月。

[5] そもそもニューヨーク市民の 48%は家庭では英語以外を話し、36.4%は外国生まれなので、バスの中が特段変わった風景というわけではない。

※本稿の著作権は日本 FP 学会・執筆者に帰属します。

NY に長く暮らしている方によれば、7 日間平均死者数が 800 人を超えた 20 年の 3 月頃はタイムズスクエアが閑散とする異常事態となり、夜を通して救急車のサイレンが鳴り響き、それは恐怖だったそうだ。そこからワクチン接種が始まり、21 年の 9 月にはブロードウェーが 1 年半ぶりに再開、11 月の感謝祭メイシーズパレードも一般公開となり、街の活気は徐々に戻っていった。

よくアメリカ人はマスクをしないのではないかと聞かれる。たしかに夏の暑い日に街や公園を歩いている人にマスクをしていない人は多い[6]。しかし彼らも腕や顎にマスクを用意している。人が多い場所、お店に入る時、地下鉄やバスに乗車する時にはマスクをしている。もちろん今回の観光バスの中は 100%の着用率であった。バスは定刻に出発しマンハッタンを北上する。ガイドからも重ねてマスク着用のアナウンスがあった。見慣れた街を眺めながらコロナ禍のニューヨークを思い出していた[7]。

＜経済を回すひとつのアイデア＞

バスはコロンバス通りを北上しアッパー・ウェスト・サイド（Upper West Side）地区を走る。広い通りの両サイドでコロナ禍にできた新しい風景を見ることができる。それが路上レストランだ。健康と経済の両立は日本でも難しい課題だが、ニューヨーク市のアイデアの

---

[6] 21 年 5 月にワクチン接種完了者（2 回）のマスク着用義務化を解除しそれぞれの事業所の判断に任せることとなった。その後も地下鉄やバスやスーパーでは Mask Required と表示されているところではマスクの着用が求められた。

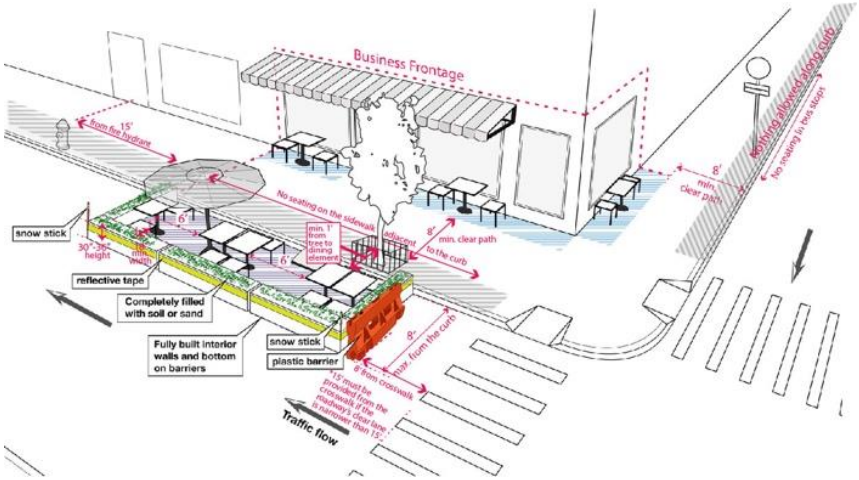
[7] 滞在期間中のコロナに関するキーワードは“mandate”であった。マスクとワクチン接種の義務化である。市の職員は 21 年 10 月末までに少なくても一回のワクチン接種が義務付けられ、正当な理由なく接種しなかった人を無給休職扱いとし、22 年 2 月には接種に応じなかった職員を解雇した。ローカルニュースでは毎日警察や消防などのワクチン接種率を公表していた。義務化は民間企業の従業員にも波及した。市民も観光客も 9 月以降 12 歳以上は屋内飲食店を利用するときには写真付き ID とワクチン証明書の提示を求められた。そこで当初困ったのが日本の接種記録書である。A 4 用紙には氏名も含め日本語しか書かれておらず、一応別紙で発行された「日本で発行された新型コロナワクチン接種記録書を保有していることを証するものです」と英語で書かれている用紙二枚を見せないといけない。お店の人はどんな国の証明でも確認するのは ID の名前と接種証明の名前が一致していることと生年月日だ。見慣れない言語に苦笑いされながら、入るのに時間がかかった。ほかのお客さんが CDC7の小型カードをさっと見せて問題なく中に入れるのを羨ましく思ったものだ。現在のデジタル庁接種証明書アプリのように、紙であってもせめて最初から日本語英語併記にできなかったのだろうか。

また政府による抗原検査キットの無料配布が三回あった。発熱があるなしに関わらずネットに住所と名前を記入するだけで一世帯につき一回目、二回目に 4 回分、最後の三回目には 8 回分、合計 16 回分の検査キットが送料無料で送られてきた。転売目的もあるかもしれず、サイトの存在を知らない人は受け取れないかもしれない。全てを公平にするのは無理だが一番簡単な方法で配る。アメリカを感じる出来事でもある。

※本稿の著作権は日本 FP 学会・執筆者に帰属します。

一つを解説する。

この路上レストランは、当初の収容人数制限などで厳しい状況の飲食店を支援するために作られた制度で、申請すると店の前の道路から約 2 メートル 43 センチ程の幅まではみ出て小屋を立てて拡張してよいというものだ。下図にあるように、歩道を確保すれば、店先にテーブルと椅子を並べる Sidewalk と併せて、屋外での飲食を可能にした。ここならワクチン証明の提示もいらない。市では、これが成功したので恒常化しよう目論んでいるが、冬の寒い時期にはホームレスの寝床やゴミ捨て場になり火事の危険もあるので、屋内でもワクチン証明提示義務がなくなった現在では撤去した店舗もある。季節のよい時期は店内より人気で賑わっていた。冬の寒い時は透明の風船の中にテーブルと暖房をセッティングしている店もあった。



出所：https://www1.nyc.gov/html/dot/html/pedestrians/openrestaurants.shtml

＜大学の感染対策＞

コロンバス通りをさらに北に進むと 110th Street あたりから徐々に学生の姿が多くなる。コロンビア大学のあるモーニングサイド・ハイツ（Morningside Heights）地区に入った。次に大学での感染対策を紹介する。

大学や語学学校なども市の mandate に従う形で独自の感染予防システムを構築していた。使用可能マスクの指導[8]と、ESL(English as a Second Language)のような市民対象の講座であっても対面授業を受講するには COVID-19 のワクチン及びインフルエンザワクチンの接種が義務付けされた。

コロンビア大学では、もとより学生は MMR（はしか、風疹、おたふくかぜの混合ワクチ

[8] 年明けには布製マスクの使用は禁止、N95, KN95, KF94 もしくはサージカルマスクのみ許可となった。

※本稿の著作権は日本 FP 学会・執筆者に帰属します。

ン）とインフルエンザワクチン接種は必須であり、これに加えて COVID-19 のワクチン接種証明を大学の健康管理センターに写真を撮ってアップロードする。これが認められなければ通学できない。そのほかのいくつかの条件を RPG（Role-Playing Game）の如くクリアし、学生証とリンクしているアプリで Green-Pass を得て、さらに毎日の健康チェックをマークしないと建物入り口でドアが開かない仕組みとなっていた。

なかなか厳しいように聞こえるが、警備員のいないドアからなら、誰かが入った後ろをついていけば入れるし、中にいる人に開けてもらう人もいた。そこは防ぎようがない。建物の中ではマスクをしていても外で大勢が密着してマスクなしでお喋りしていることもある。すべてをきっちり公平に厳格に運用するというよりは、表面上でも厳しくして接種する人をなるべく多くすることを第一目的としていると感じた。また、ワクチン接種していても PCR 検査は必要であり、対面授業開始前検査と、ランダム検査に応じる義務もあった。検査は校内で無料で行われた。

秋学期の授業はオンラインと対面授業が併用して行われており、ほとんどの学生はキャンパスに戻ってきていた。年末のオミクロン株感染拡大で 1 月からの春学期は最初二週間がすべてオンラインとなったが、その後は対面のみの授業となった。春学期終わりにはマスクは“optional“任意となった。「お互いの選択を尊重しよう」そんな張り紙をよく目にした。

＜マンハッタンのクレイジー住宅事情＞

コロンビア大学を北西に向かうとそこはハーレム（Harlem）だ。バスの観光客は 125th Street にある有名アーティストを輩出したアポロシアター前で記念撮影をする。アポロシアターはすでに何度か訪れていたので、ガイドの案内を聞き流しながら、筆者が注目したのは、すぐ隣に建設中の“The affordable housing”（お手頃価格の住宅）の看板だ。お手頃とはいくらか、すぐに検索を始めた。

このアパートは市の住宅政策の一環で地域の所得中央値の 50%から 130%までの人が抽選で借りることができる。所得に応じて家賃が変わり、収入が中央値の 50%、年 28,835$ならワンルームで 755$、収入が 80,606$なら 2,522$となる。マンハッタン内としては破格の安さだ。

不動産仲介会社が毎月発表するマンハッタンのアパート入居者が支払った家賃の中央値は 7 月に 4,150$となり 6 ヶ月連続で過去最高を更新した[9]。平均は 5,113$と前月比 1.1%も上昇した。現地の人もクレイジーと表現する住宅価格、家賃の上昇と供給不足はニューヨークの主要問題である。

参考までに、我が家がアパート探しを始めた 21 年の 6 月頃は富裕層が郊外に引っ越した

[9] https://www.elliman.com/corporate-resources/market-reports（8 月 16 日閲覧）

※本稿の著作権は日本 FP 学会・執筆者に帰属します。

ことからマンハッタンの家賃はコロナ前より下がっていた。それでもアッパー・ウェスト・サイド 1961 年築の約 50 平米の 1 LDK（1 ベッドルーム）の家賃は月 3,300$。もちろん洗濯機は部屋にはなく、地下室で共同使用だ。加えて 1 ヶ月分の保証金、火災保険料、仲介手数料がかかった。1 年後、更新するなら月 400$の値上げを提示され、その後その部屋は３,900$で賃貸情報が掲載されていた。

国勢調査によるニューヨーク市全体の 2020 年世帯収入中央値（推定）は 67,046$だが、アッパー・ウェスト・サイドだけでみると 136,735$（第 5 位）だ。南西部のトライベッカとグリニッチ・ビレッジの所得中央値は 162,092$（第 1 位）だ。このあたりになると 1 ベッドルームで安くても 6,000$台になる。日本で世帯所得が 2,000 万円を超えるのは上位 1.2%[10]だがマンハッタンの人気地域では中央値だ。いかにマンハッタン内に住むのが大変かこれらの数字で明らかであろう。

こんなに高くて皆さんどう暮らしているのだろうと思われるだろう。長く住んでいる人は家賃上昇を抑制するレントコントロール対象物件の場合もあり、若い人や学生はシェアハウスや（違法・合法含めて）又貸しなどを利用している。日本人向け掲示板でも少し治安が悪い場所ではあったが、1 室 700$の広告も出されており、実際コロンビア大学の日本人留学生も地元の方のアパートの一室を借りており、中国人留学生は大学の近くに友人 4 人でシェアして一人 900$と話していた。他には通勤・通学時間はかかるがクイーンズやブルックリン、もしくは隣接するニュージャージー州から通う人も多い。

ニューヨーク市は、マンハッタン、ブロンクス、クイーンズ、ブルックリン、スタテンアイランドの 5 つの行政区（boroughs）からなり、さらにマンハッタンにはハーレムやアッパー・イースト・サイド、ミッドタウンなど 53 の地区（neighborhoods）に分かれる。前述した通り所得も違い、それぞれに雰囲気が異なる。そして街を歩いて気が付くのは、さらに 1 ブロックごとに風景が変わることだ。歩いている人の速度、肌の色や顔つき、話す言葉、ガラッと変化する。先ほどまでおしゃれなお店に活気あふれる人々が笑顔でいたと思ったら、横断歩道一つ渡ると急に人寂しくなり路上でたむろしている集団に身構える気持ちになる。ふっと上を見るとプロジェクトと呼ばれる低所得者向け住宅がある。ハーレムでは観光客は 2,3 番地下鉄の駅より東を歩いてはいけない。そして 139th Street より北も呑気に歩けるところではない。住む場所と住むアパートの内容によって治安はガラリと変わる。

冒頭のお手頃価格住宅はハーレムの Gentrification の一環でもある。ハーレムはセントラルパークの最北端 110th Street から北上するように急速な Gentrification が進んでいる。大手高級スーパーマーケットやお馴染みのファストファッションブランド、おしゃれなカフェが進出し、家賃高騰するマンハッタン中心部には住みづらくなった中間所得層が、若者を中心に移り住でいる。2000 年には 77.3%を占めていたアフリカ系アメリカ人は 2019 年に

---

[10] 厚生労働省『2019 年国民生活基礎調査』10 ページ。

※本稿の著作権は日本 FP 学会・執筆者に帰属します。

は 54.3%まで低下。一方白人は 2.1%だったのが 15.5%まで上昇している。Gentrification という名の再開発によって、それまでよりも所得の高い層の移住を促進すれば、街はきれいになり、治安は良くなる。だが、そこに住めなくなった低所得者層はさらに北に、さらに治安の悪い地域にスライドするように追いやられるのが現実である。大手高級スーパーも進出時には地元住民を雇う取り決めをするが、そのスーパーで買い物をするのは地元住民には難しいかもしれない。スーパーによって商品ラインナップから顧客層が大きく違うのもまたニューヨークの特徴であろう。

＜生活費の差と物価上昇＞

我が家の例にはなるが、家賃以外の日常基本生活費は日本の約２倍と考えてよい。食品は工夫し節約したがトイレットペーパーなどの紙類や洗剤など生活用品が高かった。当初 12 ロールで 12$を超えるトイレットペーパーに驚いたが、慣れてきて安い店を探せば９ロール５$で買えた。もちろん質は落ちる。さらに日本の１ロールとは違いフワッと撒かれているので減りが早い。よく日本のニュースで卵の値段が高いと報道されているが、表現には注意が必要だ。日本でも大型スーパーで一番安い卵と高級スーパーで買う高級卵の値段は違う。ニューヨークでも 12 個パック２$程度のものもあれば、10$以上する高級卵もある。どこをどう切り取るかで印象は変わる。

次に物価上昇の家計への影響だが、実際に筆者が１年間、同じスーパーで購入した同じ商品の価格の変化をみると、一番安い卵で当初 1.69$だったものが 1.99$になり約 18%上昇した。4 月以降は一番安い卵はすぐに売り切れるので平均 2.5$の卵を購入していた。牛乳は 4.2%, 冷凍チャーハンは 6.7%の上昇、冷凍餃子や炭酸水は変化しなかった。

22 年 8 月 10 日、7 月の米国消費者物価指数は過去１年間に全品目季節調整前で 8.5%上昇と発表された。記録的な物価上昇を記録した６月（前月比 1.3%、年間 9.1%）に比べてガソリン指数が 7.7%下落し、食品と住宅指数の上昇を相殺した。それでもこの１年でガソリンは 44%、電気は 15.2%,食品は 10.9%,外食は 13.1%上昇した。生活実感としては石油価格や人件費高騰を最終消費財やサービス価格に素早く転嫁しやすいという印象だった。求められる外食のチップの割合も上昇した。レストランの価格はネットで確認するものと店舗では違い、スーパーも手書きで上から価格訂正していた[11]。

＜Systematic Racism/Police Brutality＞

バスはハーレムをさらに北上し、東に折れてハーレム川にかかるマコムズ・ダム橋を渡りブロンクスに入る。2009 年に新しく建てられたヤンキー・スタジアムが見えてくる。かつ

[11] 記録的な物価上昇と急激な円安ではあったが、夫の円建ての給与・手当等は当初のまま据え置かれた。

※本稿の著作権は日本 FP 学会・執筆者に帰属します。

て「ブロンクスは燃えている」[12]という言葉ができたほど、貧困と治安の悪さで有名な街を走りながら、ツアーガイドがおもむろに自身の生い立ちや友達のことを話し始めた。

30 歳手前に見える彼はポーランド移民三世だそうだ、祖父母はアッパー・ウェスト・サイド 70th Street 付近の古いがレントコントール対象物件に暮らし、自分はコロンビア大学付近で高校まで育ち、現在はブルックリンに住んでいるという。

「野球好きでハーレムやブロンクスに毎週のように野球をしに来ていました。だからアフリカ系アメリカ人の友人も多くいます。ハーレムやブロンクスのプロジェクト（低所得者層向けアパート）出身の友人も多いですが、彼らは同じ高校に通い、しっかり勉強し、同じように野球を楽しんでいる良い仲間です。ですが、全員、道を歩いているだけで警察に声をかけられ所持品検査（Stop-and-Frisk）された経験があります。何もしていないのに、です。そして皆さん、僕自身がこれまで警察に声をかけられた回数解りますか？」答えは明白だ。「白人に見える僕はただの一度もないのです」彼の言葉は重く真剣で、心に響く。それは筆者がこの一年学んだ事でもあった。まずは彼の体験を数字で確認する。

2013 年には違憲判決が下された路上での呼び止めと身体検査は、ピークだった 2011 年にはニューヨーク市警察管轄で年間 685,724 件あり、その内 88%の 605,328 件が無実であった。呼び止められる人の 87%はアフリカ系アメリカ人およびラティーノであり白人との人口比率からみても偏りがあるのがわかる[13]。アメリカにおける人種差別は個人的な差別的感情ではなく、歴史的経緯から社会構造および経済システムまで根深く組み込まれている制度的差別（Systematic Racism）と呼ばれる。南北戦争後の再建（Reconstruction）の失敗後、奴隷制がなくなったことで立ち行かなくなった南部地区の衰退を背景に、奴隷制にとって変わる新たな差別ジム・クロウ法[14]が南部のいたるところで成立する。1896 年アメリカ最高裁が公共施設での白人と黒人（colored）の分離を合憲と判断し、“Separate but Equal” 分離すれど平等という名の人種隔離が常態化してしまった。1960 年代の公民権運動で今度こそ平等が実現するかと思われたが、そのバックラッシュから冤罪による逮捕、警官による射殺、大量投獄によってアメリカに蔓延する恐怖と差別は問題をより複雑化させて解決の糸口が見えないでいる。

---

[12] 1980 年代にアパートの大家が火災保険を手にいれるために毎晩火事が発生していたことからできた言葉である。ブロンクスでも特に治安の悪いのはサウスブロンクス地区だ。

[13] NYPD のアニュアルレポートによると 2021 年は 8 ,947 件の呼び止めでその内 61%は無実であった。件数は減少しているが、60%がアフリカ系アメリカ人、27%がラティーノ。白人は 9 %だ。NY 市の人口比率は 2019 年の数値だがアフリカ系アメリカ人 21.7%、ラティーノ 29.1%、白人 32%、アジア系 14.3%だ。

[14] 個別の法律ではなく南部の人種差別的な法律の総称。

※本稿の著作権は日本 FP 学会・執筆者に帰属します。

World Prison Brief[15]によると 2019 年に刑務所に収監されている人数は 2,067,800 人にのぼる。アメリカの人口 10 万人あたり 629 人であり、日本が 37 人、ドイツが 67 人、フランスが 106 人と比較するとその突出した多さが目立つ。World Prison Brief には人種構成のデータは掲載されていない[16]。よく若いアフリカ系アメリカ人男性の 3 人に 1 人、もしくは 4 人に 1 人が一生のうちに一度は刑務所に行く可能性があるという数値が散見される[17]。これは統計の取り方や基準年、年代の取り方などによって見え方が変わってくるのではっきりと正確な数字かどうかは慎重に考えるべきだが、人口構成よりもアフリカ系アメリカ人およびラティーノの比率が高いのは事実である。一度でも実刑判決を受ければその後のキャリアは閉ざされる、父親が刑務所にいればその子供も教育機会に制限がかかる。貧困は連鎖する。サウスブロンクス地区の所得中央値は 25,074$、トライベッカ地区の 6 分の 1 以下だ。偏った大量投獄は低所得者層の賃金と昇給を抑制する効果を持つ。少し話は飛ぶが、就業者一人当たり付加価値生産性で測った労働生産性が日本はアメリカの 56%でしかないと[18]、アメリカの生産性の高さが強調されるが、不平等と不条理（“人に寄る”で片付けられる諦めのシステム）で回す経済と価格形成の違いが高い付加価値生産性を生んでいないか。生産性の決定要因は複合的であり単に印象だけで語ってはいけないが、良い生産性と悪い生産性が存在しないか、そんな事が頭をよぎる。

そして、筆者が 33 年前に南部で観た光景はまさに人種隔離であった。高校に行くバスは白人と黒人[19]は別であり、朝礼で体育館に集合すれば見事に真ん中から白人と黒人に分かれて座る。ホストマザーからは初日に「黒人と友達になってもいいが、我が家には決していれないので呼ばないこと。もらった食べ物は食べてはいけない、そしてトイレの便座に座ってはいけない。」と注意すべき事を伝えられた。アラバマ初の黒人女性教師である歴史の先生の教室は 9 割が黒人であった。彼女がマーティンルーサーキング牧師と実際に行進をしたという話を聞き、興味を持ってスクールバス（白人バス）の中で牧師の伝記を読んでいると、

---

[15] World Prison Brief, Institute for Crime & Justice Policy Research, https://www.prisonstudies.org より参照。

[16] 連邦刑務所だけの数値になるが、2022 年 8 月時点での人種構成は White57.6%、Black38.4%とあるが、ラティーノが White に含まれている。https://www.bop.gov/

[17] NAACP 全米有色人種地位向上協議会の HP でも「今日生まれた黒人の男の子の 3 人に 1 人は実刑判決を受ける可能性があると」明記されているが、この数字は 2001 年の投獄率をベースに司法省の統計学者が 2003 年に書いたレポート（Thomas P. Bonczar,2003）の引用であり、既に 20 年経っていることからその数字の継続利用には問題があるとの指摘もある。

[18] 日本生産性本部「労働生産性の国際比較 2021」4 ページ。

[19] ここでは対比を強調するために黒人と表記する。ちなみにブラックは差別用語ではなく、会話でも公式の書類などでも使われる言葉である。アジア人がよくニグロは差別用語と心配するが、ニューヨーク在住のネイティブに聞くと差別用語ではないようだ。しかし絶対に言ってはいけない侮辱的用語である言葉とネイティブ以外は発音を区別できない場合もあるのであえて使わない方が得策である。

※本稿の著作権は日本 FP 学会・執筆者に帰属します。

白人の小学一年生が「なんでそんな本読んでるの！読んじゃダメなんだよ！」と話しかけてきた。「なぜ？」と聞き返すと無邪気な笑顔で「だって彼らは違うから」と答えた。当時はこの状況を作っている根本的な理由と背景など理解できなかった。南部白人社会で（ある意味）守られて滞在していたアジア人が違和感を感じることはあっても学ぶ機会はなかった。そしてこの一年毎日アッパーウエストからハーレムにかけて、犯罪に巻き込まれないようにと緊張しながら街を歩き、ホームレスや人種（とはいいたくないが）毎に分断された職業や格差の現実を目の当たりにしながら、当時の一つ一つの出来事を思い出していた。

＜変わる街、深まる問題＞

その後バスはクィーンズの高級住宅街、ユダヤ教徒の街、壁落書き（Graffiti）で治安を良くしたブッシュウィック（Bushwick）、ブルックリン橋などを回るが、下車ポイント毎で、各国の観光客が勝手にいなくなりガイドも頭を抱えることになる。最後は探すのを諦めてなんとかなるだろうと置き去りにしてバスは進んだ。これもまたニューヨークらしい。最終地点は SOHO（South of Houston Street）だ。昔は倉庫街で芸術家やファッション業界の人が集まる街というイメージだったが今は高級ブティックや高級レストランの街となっている。充実したバスツアーに少し多めにチップを払ってバスを降りた。

時代とともにニューヨークは変化する。33 年前に旅行で訪れたニューヨークは今よりずっと暗くくすんだイメージであった。地下鉄は乗るなと注意された。無謀にも一人で歩いて少し怖い思いもした。それから比べると治安は良くなり地下鉄も乗れる。実際に黒かったセントパトリック教会は改装され真っ白に輝いていた。しかしコロナ後にアジア系女性が地下鉄のホームから突き落とされたり、アパートで殺されたり、邦人が被害にあったと領事館から注意喚起のメールがきたり、毎日マンハッタン周辺での銃による殺人事件をニュースで耳にする限り、常に気を引き締めて歩くことが必要だ。暗くなれば女性ひとりでは歩けない。最寄りの地下鉄の駅でさえ迎えに来てもらう。ニューヨークに 9 年間住んでいる女性でも、毎日、今日は無事に帰れたと思いながら家の扉を開けるそうだ。なんと不便な事だろうか。

路上で物乞いをする人は徐々に増えていった。街歩く人が小銭や食べ物を渡す。教会の食糧配布には長蛇の列ができる。先進諸国の中間層の没落は指摘されて久しいが、特にアメリカの中間層没落の弊害は街のいたるところで感じることができた。所得格差と人種差別が生み出す分断と恐怖の相互作用は民主主義をも脅かす[20]。今回の体験は短くも濃く、楽しく実り多くはあったが、少し疲れた一年でもあった。

---

[20] ピーター・テミン著（栗林寛幸　訳）『なぜ中間層は没落したのか　アメリカ二重経済のジレンマ』慶應義塾大学出版会、2020 年。

※本稿の著作権は日本 FP 学会・執筆者に帰属します。